

氏 名	千 手 佑 樹
学 位 の 種 類	博士(医学)
学 位 記 番 号	甲 第 1221 号
学位授与の日付	2020年3月8日
学 位 論 文 題 名	Interrater agreement between clinicians' ratings and patients' self-assessments for body function categories of ICF Rehabilitation Set 「ICFリハビリテーションセットの心身機能項目における患者医療者間の評価の一致性」 Japanese Journal of Comprehensive Rehabilitation Science. in press
指 導 教 授	大 高 洋 平
論文審査委員	主査 教授 園 田 茂 副査 教授 廣 瀬 雄 一 教授 八 谷 寛

論文内容の要旨

【緒言】

国際生活機能分類(以下「ICF」)は、生活機能についての国際統計のベースとなる分類である。我々は、ICFの項目の中からリハビリテーション患者用に項目を抽出されたICFリハビリテーションセットという30項目の項目セットを対象に採点用リファレンスガイドの作成を行い、良好な検者間信頼性を確認してきた。しかし、できるかできないかという明確な評価の軸がある歩行や排泄などの活動の項目の評価に比べ、筋力の機能や情動機能などの心身機能の項目の評価においては、何を持って問題があるかと考えるかが医療者と患者の視点によって相違が生じる可能性がある。そこで本研究では、医療者の視点からの評価が患者にとっての問題を適切に反映できているかどうかを検証するため、患者医療者間の評価の一致について検証を行った。

【目的】

ICFリハビリテーションセットの心身機能項目について、患者自身によるアンケート評価と医療者による採点用リファレンスガイドに基づいて行った評価を実施し、患者医療者間の評価の一致、分布について検証する。

【対象】

2017年4月から2018年11月にかけて、藤田医科大学病院、藤田医科大学七栗記念病院でリハビリテーション施行中の患者合計88名(年齢: 65.4±15.3歳、男性: 56名、女性: 32名、脳血管疾患: 63名、運動器疾患: 10名、呼吸器疾患: 4名、心疾患: 4名、その他: 7名、入院: 77名、外来: 11名)を対象とした。MMSEが23点以下もしくはアンケートに回答できない症例は除外した。

【方法】

9つの心身機能項目について対象患者がアンケートによる自己評価を行い、同じタイミ

ングで医療者が採点用リファレンスガイドを用いた評価を行った。評価者は医療専門職5名で、1名の患者につき1名の評価者が評価を実施した。各項目についての患者医療者間の評価の一致を重み付け $\kappa$ 係数を用いて検討した。また、検者評価および患者評価の合計点数の分布および平均値の比較を行い、合計点数の患者医療者間の一致を、級内相関係数を用いて検討した。

【結果】

各項目の重み付け $\kappa$ 係数は、0.58-0.87の範囲に分布し、9項目中8項目で良好とされる0.6以上の値をとった。欠損値を除いた全項目の合計値の級内相関係数は0.85と、非常に良好と分類される値を取り、医療者評価と患者評価のそれぞれの合計値に有意差を認めなかった。

【考察】

心身機能項目の評価において、患者と医療者の間で全般に良好な一致が示され、採点用リファレンスガイドを用いて客観的な所見に基づいてなされた医療者の採点が、患者にとっての問題の程度を全般的によく反映しており、採点用リファレンスガイドが臨床的に有用であることを示す結果であると考えられた。採点用リファレンスガイドは、問題の頻度や程度など問題の複数の側面を総合的に考慮して採点するように作成されており、患者の主観に影響しやすい日常の活動への影響の有無にも触れているため、単純に症状の強さ、程度を推測する場合に比べて、患者の主観的な評価と一致しやすかった可能性がある。

【結語】

ICFリハビリテーションセットに含まれる心身機能項目に対し、患者自身による問題の程度の評価と採点用リファレンスガイドを用いた医療者の問題の程度の評価について的一致について検討を行い、良好な一致を示す結果を得られた。採点用リファレンスガイドを用いた医療者による心身機能の評価は、患者の抱える心身機能の問題を記述する手段として有用であると考えられた。

論文審査結果の要旨

本研究では、国際生活機能分類(ICF)リハビリテーションセットの心身機能項目において、患者自身の評価と医療者評価の一致率が検証された。

リハビリテーション施行中の患者88名を対象に、9つの心身機能項目に関するアンケートによる自己評価を行うとともに、同じタイミングで医療者が採点用リファレンスガイドを用いた評価を行なったことが報告された。各項目の重み付け $\kappa$ 係数は、9項目中8項目で良好とされる0.6以上の値を取り、医療者評価と患者評価のそれぞれの合計値には有意差を認めなかった。心身機能項目の評価において、患者と医療者の間で良好な一致が示され、採点用リファレンスガイドを用いた医療者の採点が患者の認識する問題の程度を全般的によく反映しており、採点用リファレンスガイドが臨床での採点を容易にするために役立つことが示された。

質疑では、臨床でどう役立つかとの質問があり、従来の評価法より包括的な評価でありリハビリテーションの質向上に繋がられると回答された。認知機能低下の患者、疾患別での検討、バイアスのないサンプリング法など、更なる検討の余地が議論された。本研究の結果はICFを用いた医療者による評価が患者の問題を適切に反映していることを示しており、ICFの臨床使用への道筋をつける重要な一歩と考えられ、学位論文として適切であると判断された。